

文部省特選  
文化庁芸術作品賞受賞  
教育映画祭  
優秀作品賞受賞

優秀映画鑑賞会推薦  
日本映画ペンクラブ推薦

伝統工芸の名匠

# 土と炎と人と

——清水卯一のわざ——



# 「鉄釉と清水卯一の陶芸」

—長谷部 満彦—  
(福島県立美術館長)

清水卯一氏は、「鉄釉陶器」の技術で昭和60年春、「重要無形文化財保持者」の認定を受けた。鉄釉の技術に限れば、青年時代に氏が教えをうけた石黒宗麿について2人目の認定であり、ともに京都を本拠としてこの陶技を攻究し、展開させてきた陶芸家であることも共通している。清水氏は現在では工房を滋賀県の琵琶湖畔に移し、近在に原料を求めて新しい鉄釉陶器制作に没頭している。



口元をまわす表情にも力が入る

日本の高温焼成の施釉陶器は、平安時代に現在の愛知県下にあたる猿投窯で、灰を釉薬に応用する基礎技術が開発され、生産されだした。鉄釉は続く鎌倉時代に、灰釉から派生した一技法として瀬戸窯で開発され、壺、瓶子、仏具類などの施釉技法として採用されたのが始まりである。今日、古瀬戸鉄釉、あるいは古瀬戸褐釉などと呼ばれている黒褐色の施釉陶器がそれで、彫り模様やスタンプ模様など素地装飾を施した上から全面に鉄釉をかけ、焼成した装飾的な陶器であった。現在、鉄釉の技法そのものは、日本の各地に伝承されており、釉技としてはもっとも基本的かつ一般的な技法になっている。

石黒宗麿の鉄釉の性格は、柿釉や天目(黒釉)など、大正期くらい鑑賞陶器流行の発端となった新来の宋瓷を再現する方向で進められてきたものであって、日本的な鉄釉とは異なるものであった。清水氏の釉技も、宗麿と同じように基本的には宋瓷に啓発されてはいたが、もちろん単なる形式受容として行なわれたものでないことは、柿釉、青瓷、鉄耀、蓬萊磁それぞれ、全く作者独自の構成のみごとな鉄釉の展開を見ても明らかである。陶器の構成は、陶土、釉、焼成法をすべて総合したトータルなものとして捉えられなければならないが、清水卯一氏の陶芸はこうしたトータルな構成の典型として見ることができるだろう。

近年氏は、過去の豊富な体験に基づく創意にみちた構成を行なうことによって、素材の優れた特性をひきだし、個性的で力強い陶芸表現をさらに展開させている。彼によって鉄釉は限りなく豊かな表情を、将来もわれわれに示し続けてくれるであろう。



登窯を净め、心をこめて焚く初窯焚き



釉薬をかける

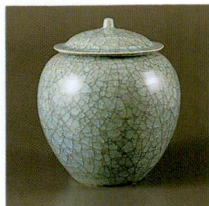


窯を焚き、火色を見ること二昼夜





蓬萊燿茶盃



青瓷蓋付飾壺



淡青釉波壺



柿釉鉄鉢



鉄燿扁壺

作品名：シリーズ〈伝統工芸の名匠〉  
「土と炎と人と」  
——清水卯一のわざ——  
(35mm/カラー/31分)

企画：財団法人ポーラ伝統文化振興財団  
製作：株式会社プロコムジャパン  
監修：長谷部満彦

製作スタッフ：製 作・神崎晴之  
山崎守邦  
脚本・演出・山添 哲  
撮 影・広内捷彦  
照 明・岡本健一  
音 楽・間宮芳生  
録 音・堀内戦治 (アオイスタジオ)  
現 像・IMAGICA  
解 説・金内吉男

協力：文化庁文化財保護部  
東京国立近代美術館  
京都国立近代美術館

Photo : TUNERO KUWANO, KATSUHIKO HIROUCHI, KAZUHIKO OHORI/Design : WIT

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

財団法人 **ポーラ伝統文化振興財団**

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル2階  
TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597

2,000-03.6